
防人の詩

由良川成美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

防人の詩

【Nコード】

N2890BA

【作者名】

由良川成美

【あらすじ】

南の地で戦火が上がる時、防人たちは銃を取る。異次元近未来的ミリタリーアクションをここに。

プロローグ

時は二一世紀。東アジアは混沌の迷宮に囚われていた。国家間の軍事的衝突。政治、宗教における様々な思想からなるテロリズム。多くの血が大地と海を染め上げ、多くの毒が空を穢した。

一九九〇年八月。南沙諸島にて、中華人民解放軍とインドネシア国軍との間で、大規模な衝突が発生し、紛争に発展した。これが南沙諸島紛争の始まりである。

近隣諸国は以前から、この地域一帯の領有権を巡って、争っていたが本格的な軍事衝突はこれが初めてだった。

しかし近隣の諸国はこの紛争に介入することを嫌った。中国とインドネシア。どちらかに味方をすれば、彼らの主張する領土を認めたと国際社会に解釈されかねないからだ。

頼りのアメリカは、湾岸戦争後から厭戦気分の漂う世論の動向から、派兵については及び腰となっていた。

その後、両国間の紛争は数年続き、一向に解決の兆しを見せなかった。そして二〇世紀最後の年。それは最悪の展開を見せる。

インドネシア国内に拠点を置くイスラム系過激派組織が、中国上海にて小型核によるテロを実行したのだ。使用されたのは旧ソ連製の五キロトンの小型核爆弾で、数万名もの犠牲者を出す大惨事となった。

中国共産党は第二砲兵（核を運用する解放軍の部隊）によるインドネシア全土への核報復を宣言。宣言から数時間後、首都ジャカルタは炎に包まれた。

両国間における全面核戦争から世界大戦への飛び火を恐れた、国連の安保理理事会はアメリカ海軍第七艦隊を主力とする国連平和維持軍の南沙諸島への派兵を決定した。

必死の平和交渉。水面下での継戦派に対する破壊工作——平和維

持軍による南沙諸島とその周辺海域への展開により、東アジアが核の火に包まれるのを何とか回避した。

だが和平交渉は核による先制攻撃を被った中国が主導する形となり、南沙諸国の領有権は中国が全面的に掌握するに至った。

そして問題はそれだけではなかった。イスラム過激派が核による民間人の大量虐殺を行ったことにより、一般のムスリムへの弾圧が国際規模で発生したのだ。

この動きは、中国に南沙諸島の領有権を奪われた東南アジア諸国で多く見られた。そして二一世紀初頭。再び悲劇が起こる。インドネシア国内でキリスト教徒によるムスリムの少女に対する婦女暴行殺人事件が発生したのだ。

その事件の様子はインターネットの動画共有サイトにアップロードされ、一二歳前後の少女が凌辱の末、チェーンソーでバラバラにされるその動画は、さぞかし世界中の人々に嘔吐を催させたことだろう。

ここからムスリムとイスラム教徒による宗教戦争に発展——これがインドネシア宗教戦争である。この戦争における死傷者は休戦同意に至るまでに二万名近くにも及んだ。

それ以来、宗教問題に起因するテロリズムの波が、東南アジア諸国に波及し、深刻な国際社会問題に発展した。

アメリカは東南アジアでの治安回復の大義名分のために、東アジア圏における米軍の増援を決定した。アメリカ国内の世論もこの時ばかりは、ホワイトハウスのこの政策を支持した。

だがこれにより多くの米軍基地を有する日本の——とりわけ沖縄への負担が著しく大きくなる結果となった。

さらに沖縄での対米感情は決して良いとは言えなかった。これは長年、政府と米国の基地政策に頭を悩まされてきたこともあったが、つい最近、米海兵隊の兵士による少女暴行事件が発生したばかりだ

つたのだ。

他にも中国の軍事力の増強や、北朝鮮の核問題など、多くの問題を抱える東アジアに、救いの光が差し込むのは何時なのだろうか。

FPS（二足歩行型の戦闘用強化外骨格）の操縦席は、とにかく狭い場所だ。しかも正面と左右にあるモニターと、計器類以外の光は無く、異様な圧迫感を覚える。FPSの操縦士を養成する課程では、それが原因で脱落する者も多いと聞く。

全高四メートル、乾燥重量二トン、全備重量四トン、攻撃ヘリのコックピットのキャノピー部分を全て装甲で覆い、手と足を付けたような一四式戦闘外骨格の操縦席で、フォックス3のコールサインを持つ高坂幹弘（こうさかみきひろ）一等陸曹はテッパチと呼ばれる八八式鉄帽に備えられたHMD——ヘッド・マウント・ディスプレイの位置を少し調節した。このディスプレイはAH64攻撃ヘリコプターのガンナー（射手）が装備するものと同じような形状をしていた。

彼の年齢は二一歳。しかし年齢の割には幼い風貌をしている。しかしその両眼は鍛え抜かれた兵士の眼光が灯っている。

「こちら指揮車」

無線のイヤフォンから女の声がする。後方に展開している八八式指揮通信車の中で指揮を執る葵風子三（あおいふうし）等陸尉だ。幹候（幹部候補生学校）を卒業したばかりの初任幹部で、A幹だった。

A幹とは防衛大学を卒業した幹部のことを指す。また一般入隊で陸曹に昇進した後に、各試験を受験し幹部に昇進したものをB幹、一般大学から幹部候補生学校に入学したものをC幹と呼ぶ。

「現在、敵勢力一個小隊約二〇が市街地より離れた山間部にある洋館に潜伏している模様。なお敵は生物化学兵器を保有している可能性が高いと、情報筋からの報告があった。今作戦の目的は敵テロリストの殲滅と生物化学兵器の奪取にある。武運を祈る」

高坂たち一四式の操縦士はそれに応える。

「フォックス1了解」

フォックス1は真鍋将太（まなべしやうた）陸曹長で、小隊の実動部隊であるフォッ

クスチームのリーダーだ。戦闘においては突撃を担当する。

「フォックス2了解」

フォックス2こと雁屋琴音^{かりやことね}二等陸曹だ。戦闘では重火力による支援を行う。

「フォックス3了解」

高坂は真鍋と同じく突撃を担当する。

「フォックス4了解」

フォックス4は三山武光^{みやまたけみつ}三等陸曹だ。これもまた同じく突撃を担当する。以上四名が、特殊機械化小隊の前衛を担当するフォックスチームのメンバーだ。

「カウントを開始する。突撃五秒前、四——」

真鍋のカウントを聞きながら高坂は言い知れぬ高揚感を覚えた。

「三、二——」

ゆっくりと息を吐きながらジョイスティックを軽く握る。FPSの操縦方式は二本のジョイスティックと二本のラダーペダルによって行われるシンプルなもので、ボイスコマンド入力採用と基本動作の自動化によって、操縦士の負担を軽減する形を取っている。

「一——」

次の瞬間、高坂は前進の血液が沸騰したような錯覚を覚えた。

「状況開始！」

四体の一四式がブッシュから飛び出す。足裏に装備されたホイールで加速する。このホイール走行での最高時速は一〇〇キロメートルだった。

「前方に大型車両を確認——旧ソ連製BMP T装甲戦闘車両。数二」指揮車からの情報に高坂は軽く舌打ちした。敵の戦力は一個小隊程度だと言ってなかったか？

そうこうしている内に、敵のBMP Tからの攻撃が始まる。高坂は二門の三〇ミリ機関砲からの掃射を受けた。何発かが当たり、高坂は、ぐっと呻いた。

こちらにも二五ミリ速射機関砲で応戦する。しかし当たらない。敵

の三〇ミリ砲からの掃射でフォックスチームは完全に釘づけにされていた。

「こちらフォックス2、重火力支援を開始します」

高坂たちより後ろにいた雁屋はタッチパネルのディスプレイを操作し、敵の戦闘車両にロックオンをする。

雁屋は左肩部に積載されていたミサイルランチャーから、直径一八センチ、全長一八五センチの〇八式対戦車誘導弾が二発、発射された。そして前方のBMPが派手な火柱を上げ擱座した。

「ランチャーを切り離します」

雁屋は用無しとなった空のランチャーを捨てた。そうしている内に目的地である洋館が見えてきた。

すると真鍋の一四式の左肩部が、激しい閃光と共に爆ぜた。敵からの攻撃だ。ヘッドセットから無機質な声が響く。

「前方の洋館の屋上に敵テロリスト三名を視認。RPG対戦車口ケット砲を携帯している模様。低圧砲による掃射を開始します」

雁屋は右の肩部に搭載されている九〇ミリ低圧砲から炸裂弾を発射した。炸裂弾は屋上の上空で、TNT炸薬の花火の花を開かせた。

「テロリストの殲滅を確認」

「こちらフォックス1了解。フォックス3、4へ。これより敵の潜伏する洋館の内部に突入する」

真鍋は一気に洋館との距離を詰める。高坂と三山もそれに続いた。そして背面に搭載された二発の小型ジェットエンジンの力で、一気に洋館の屋上に上がる。

しかし屋上に着陸した三山の一四式が、バランスを崩し、地面に叩きつけられた。

「こ、こちらフォックス4！ 申し訳ありません！」

三山は慌てながらも、再びジェットを焚き、屋上に向かった。

それからチームは三山の到着を待ち、それから屋上の床に弱装爆弾を設置し、起爆させる。建物全体に負担がかからない程度の大穴が、四つほど開いた。

「全機突入態勢」

真鍋は鋭く言った。高坂たちは二五ミリ速射機関砲の引き金に指を掛けた。これでワンアクションでの射撃が可能だった。

「突入！」

暗いその穴蔵はまるで、別世界への入り口のようにだった。真鍋の号令と共に高坂たちはその中に身を投じた。

その中は薄暗く、肉眼では全容が把握できない。しかし一四式に搭載されたFLIER（赤外線前方監視装置）が極めて明瞭な視界を提供してくれる。

狭い屋内ではホイールによる高速移動は出来ないので徒歩で進軍するしかない。一定のリズムのある振動が操縦席に響く。

「生物化学兵器の容器と思われる物体を確認。場所は地下二階の東側、右から二番目の広間です」

指揮車の分析員の声がヘッドセットに響く。その広間は高坂が今いる場所から見ても、ちょうど真下にあつた。高坂は一四式のバックパックから再び弱装爆弾を取りリーダーすと、適当な場所に設置する。「こちらフォックス3、広間に突入する」

言うが否や、土煙が上がったかと思うと、床が音を立てて崩落する。その床と共に下へ落下すると、目の前にドラム缶大の容器があり、その周りにはテロリストが数人いた。高坂は容器を傷つけないようにテロリストのみを狙い撃ちする。もちろん機関砲の弾頭は炸裂弾から通常弾に切り替えて、だ。

血飛沫が飛び、肉片が舞った。

指揮車の葵は、状況をディスプレイで把握していた。ここにはフォックスチームの一四式の頭部に搭載されたCCDカメラからの情報や、各機の機体や操縦士の状況を収集、分析するシステムが導入されている。

「小隊長。無人ヘリからの情報で、テロリストの全滅を確認しました」

オペレーターが言った。

「シミュレーション終了。VRシステムダウン。整備班は各機の戦闘データの処理を急げ」

葵は言った。

正面と左右のモニターがブラックアウトし、操縦席は一瞬間に包まれたが、すぐにモニターからの光が灯る。

そこにはFLIER画像特有の青白い視界ではなく、通常のカメラ画像が映っていた。さっきまで足元に転がっていたテロリストの死体は無く、代わりにつなぎを着た整備士たちが慌ただしく走り回っている。

全ては虚像の産物だった。失敗すれば生死に関わること以外は、まるで本物の戦闘を経験したかのようなだった。

高坂は、一四式のコックピットのハッチ（人間で言う所の胸の部分にコックピットが収まっている。頭部はフレームの剛性を稼ぐために無い）を開け、外に降り立った。

真夏の陽光で熱せられたプレハブ建ての格納庫の中は、まるでサウナの中にいるような暑さだったが、蒸し風呂の中で激しい運動をしているような、一四式の操縦席に較べれば天国のようにさえ感じられた。

「ようし！ 模擬戦のデータの処理急げ！ さっさとしろ！ だらける野郎は全員、那覇湾に放り込むぞ！」

整備小隊長の緒方浩司おがた こうじ陸准尉の怒鳴り声が格納庫内に響く。その怒鳴り声に耳を痛めながら、高坂は地面に降り立った。

FPSの歴史は九〇年代初頭に、アメリカで研究開発が進められていた兵士個人が装備する強化装甲服に始まる。

しかし歩兵に不足する火力と防御力を補う目的に作られた装甲服だったが、これをすべての歩兵に装備するとなると、莫大な整備、運営に支障をきたすことから、一個小隊に一個ずつ程度の数しか配

備することが出来なかった。さらに歩兵に随伴する機動力以外は無能に等しく、中途半端な装甲と火力の強化装甲服を着用させた兵士よりも、戦車を随伴させたほうが、どれほど心強いかわからないというのが、現場の兵士の本音だった。

そこでアメリカ軍の上層部は、日本の大手企業との共同で、軍用二足歩行大型多目的外骨格、通称「FPS（Fighting Powered Suit）」の開発に踏み切った。

その後FPSは、より強力なC4Iシステムが導入されたことにより、現代戦の代名詞でもある「ネットワーク中心の戦い」に対応出来るようになっていく。

駆動部分には高性能モーターと人工筋肉。そしてホイールが採用し、整地不整地問わず、優れた走破能力を備えているものもある。

現在では日本やアメリカだけではなく世界各国で研究と開発が進められ、現在では戦車に次ぐ陸戦兵器の主役となっている。

高坂たちの隷属する機械化小隊は、沖縄に駐屯する陸上自衛隊第一五旅団の第五一普通科連隊隷下の機械化中隊の一部隊だ。

那覇市内にある駐屯地の敷地内にある営舎の一室に、高坂たちは集められていた。夏の日差しが、空調機の奮闘を嘲笑うかのように、営舎に降り注ぐ。

フォックス1の真鍋、フォックス2の雁屋、フォックス3の高坂、そしてフォックス4の三山……その他にも、第一機械化小隊小隊長の葵や整備小隊長の緒方が席に座っている。まるで学校の教室のようだな。高坂はどうでもいいことを考えた。そして目の前の教壇には、三等陸佐の階級章をつけた男が立っていた。男の名は神崎正平かんさきしょうへい。機械化中隊の中隊長だった。

自衛官というよりはヤクザの風体に近い神崎は口を開いた。

「一四式の戦闘シミュレーションを行った訳だが、だいぶもたついてきたようだな？」

いきなりぐさりと言った。

「実戦なら死ぬレベルだぞ」

するといきなり、席の最前列で、せかせかと何事かをメモ帳に書きなぐっていた葵が、急に立ち上がって、視線を中空に向けて、早口で喋り始めた。

「今回の演習によって、我が小隊には重大な問題点が生じていたことが浮き彫りとなる結果となりました。この不手際は私に一切の責任があります！ここに中隊長に対してお詫びを申し上げます！」

そう言っただけ腰を九〇度に曲げた。突然のことに神崎はポカンとしている。——いやそこまで言っていないぞ。と神崎が言う前に、葵は真鍋と緒方に向き直った。

「それで最先任上級曹長と前任上級陸曹長は、今回のここまで問題が生じた背景には、部隊の技術的問題があると思うか？それとも一四式の構造自体に何かの欠点が生じたと思うか？それとも訓練の内容に誤りがあったかと思うか？」

「は、はあ？」

何故そこまで話が大きくなるのか。そもそもさっき「一切の責任は自分にある」と言っただけではないか。その場にいる全員が呆れかえった。

「いや、問題を連隊長と旅団長に報告するにあたって、中堅の陸曹の意見を取り入れた方が良さそう？」

葵は懲りずにまた言った。無責任な真面目気質な人間ほど、口くそなものはないな。

「それは……連隊長か中隊長の命令で？」

真鍋は神崎の方をちらりと見ながら言った。神崎は肩を竦め、否定の意を表した。

「命令は受けていない。規則に則った行動だ」

葵は胸を張って言った。まあこんなアホらしいことを命じるような、人たちではないだろうな。すると横にいた緒方が最大限の営業スマイルで言った。

「お言葉ですが……私の経験上では、この程度の問題は部隊内で処

理する程度のモノなんですよ。そんな大事にするほどではありません
んよ」

もし連隊長だけではなく、旅団司令部にも話が伝われば、この小隊だけではなく、下手をすれば連隊全体の評価にも関わってくる。その辺の匙加減は、実際に部隊で揉まれている内に覚えるものなのだが……。

「し、しかし！ 部隊で起こった問題は——！」

平均よりも幾分、いや、かなり低い身長の詳細をいきり立たせながら、葵はヒスメリックで喚き立てた。

—— 黙ればかわいい残念メガネ娘。胸の割に背と器の小さいヒステリー女。歩く妖怪教本女。規則大好きチキン野郎——防大を卒業し、幹部候補生学校を出たばかりの初任幹部は、融通が利かず、バカンプ（馬鹿な幹部）と陰口を叩かれるものだったが、それにしても着任してから数週間でここまでの渾名を受け賜わるとは珍しいことだ。

すべて規則どおりにすれば部隊は動くものであり、それが真理である。この考えに逆らう者は一切許さない。そんな考えが、常日頃の言動から滲み出ているのを、真鍋は職務を手助けしている中で感じ取っていた。

小娘が調子に乗るなよ。そんな物騒な言葉が真鍋の喉仏まで差し掛かった時、部屋の戸が開いた。そちらに目を向けると、そこには第五一普通科連隊連隊長の奄美竜司^{あまみりゅうじ}一等陸佐と——

「か、神山旅団長！」

神崎が驚きの声を発すると、部屋にいた全員^{かみやまのぼる}が席を蹴って、直立不動で敬礼した。第一五旅団の旅団長。神山昇陸将補は、軽く答礼しながら、楽にするよう手でまあまあと皆を諫めた。

「いや……少し私用でこっちに來たんだがな？ どうも穏やかではない感じがしてね？」

神山のおっとりとした口調で喋っていたが、真鍋と緒方たちは首筋に剃刀の刃で撫でられているような心情だった。まさかこれで部

隊の評価が下がるようなことはないだろうな。気が気でなかった。

「えーと葵……三尉だったかな？」

「は、は！」

中空に視線を向けながら、葵は裏返った声で言った。もう泣きそうな表情だ。しかし神山はそんなことには構わず、失礼、と葵の机の上にあつたメモ帳を拾い上げた。

そして奄美にもそれを渡した。

最悪の事態を予想した真鍋は、別にキリスト教徒でもなかったが、胸の中で十字を切った。緒方も覚悟を決めた。

神山はしばらくメモ帳に目を通していたが、やがて言った。

「奄美連隊長。どう思う？」

しばらくメモ帳に眼を通した後、奄美は答えた。

「は、これは……」

部屋の温度が、二度低くなった気がした。

「大した問題ではありませんね」

「うん、そうだな。勤労なのは評価するが……こんなことでいちいち報告を入れられたら、師団司令部の通信士は過労死しちゃうよ」

そう言つて神山はメモ帳を葵に返した。恐らくその場にいた葵以外のほとんどの隊員が、胸の内で胸を撫で下ろしたことだろう。

「じゃ、お邪魔したね」

神山は何事もなかったかのように立ち去つて行つた。部屋が嵐の過ぎ去つた直後のような静けさに包まれた。

葵は唇をワナワナと震わせている。それは旅団長との対面による緊張が未だに解けていないだけではないはずだ。

「あー、葵三尉？」

静けさを最初に破つたのは神崎だった。

「報告会はこれで解散にしたいんだが……いいか？」

屈辱にまみれた表情で葵は、はいと身を震わせながら返事した。

「よし、解散！」

神崎はそう言つて手を打つと、部屋を出ていく。

「中隊長に敬礼！」

しばらくは再起不能であろう葵に変わり、真鍋が言つと、高坂たちもそれに続いた。

唇を噛みしめながら、うつむいていた葵だったが、やがて机の上の筆記具をひつたくるように掴むと、部屋を出ようとした、その時だった。

「いちいちヒステリー起こすなよな」

それはひどく明瞭に聞こえてしまった。葵は紅潮させた顔をこちらに向け、怒鳴り散らそうと――

「誰だ！ 今のは！」

高坂は教室の後ろの整備小隊の隊員たちに向かって怒鳴った。すると一人の若い陸士が直立不動で中空に視線を向けた。

「自分でありませう！」

彼は小酒井満陸士長。整備小隊の陸士のまとめ役のような存在だった。口より早く手が出るような男だったらしいが、それでも緒方の「教育」のおかげでだいぶ丸くなったらしいのだが……

「あとでうちに顔を出せ！」

高坂がそう凄むと、小酒井は、了解しましたと敬礼した。部屋の戸の方を見ると、すでに葵の姿は無かった。

その後、整備小隊の整備を手伝い、それが終わった頃には日が傾いていた。あれから葵は小隊長室に閉じこつたままだが、大丈夫なのだろうか。ちなみに小酒井は腕立て五〇〇回の刑に処した。

指導のための拳骨が暴力だ。体罰だ。人権侵害だと騒がれるようになった久しいこの時分、腕立てはこの部隊でも大変に重宝されていた。

高坂と真鍋、そして緒方は屋上に来ていた。

「さつきはすいません。余計なことを……」

高坂は、緒方に謝った。小酒井は緒方の直属の部下だ。いくら高

坂が上官だと言っても、これは越権行為になる。

「別にいいわ。そんなもん」

緒方はそう言って煙草に火をつけた。そして二人にも煙草を勧めた。二人はありがたく頂戴した。煙草の紫煙が夕焼けの空に昇る。高坂は先任上級曹長付陸曹として、真鍋のもとで働いている。

最先任上級曹長、もしくは先任上級曹長というのは、陸上自衛隊において曹士の能力活用の一環として採用された制度で、上級陸曹の活動を推進し、部隊の運用の効率化を狙ったものだ。

ちなみに緒方は連隊長付最先任上級曹長として、連隊長の奄美を補佐し、真鍋は中隊付先任上級曹長として神崎を補佐する立場にある。

「まあ、俺たちもこれ以上、面倒事はごめんだしな」

真鍋も言った。緒方たちにこれ以上、負担を駆けさせたくないが故の行動だと分かっていたからだし、若干二一歳にして異例のスピードで一曹に昇任した高坂の気苦労も分かっていたからだだった。

「それよか、今回の演習はちよいと酷かったんじゃないか？」

緒方は話題を変えた。

「来月には本土の連中とアメ公との共同演習だ。このままじゃあ恥かきかねないぞ」

いくら新兵器の扱いに手慣れていないとはいえ、コンピューターの予測では一〇分前後で終わるはずだったシミュレーションが、実際には倍以上もの時間が掛かったのは、ただけなかった。

「今まで扱っていた九七式と比べて反応が敏感すぎるんですよ一四式は。ここから歩兵と戦車との共同作戦のことも考えるのとなると正直頭が痛くなってきますよ」

珍しく真鍋は弱音を吐いた。眼は疲労で充血している。高坂も黙り込んだ。重い空気が漂い始めた。緒方は話題の切り替えの失敗したことを後悔した。

「まあ、まだ始まったばかりなんだし、そつ気に病むことは無いだろうさ」

言い出しつpegが何を言つとんだ。緒方は自分をなじったが、他にどうしようもなかった。そして場の空気を明るくしようと、またわざと明るい声を出した。

「よし、今晚飯でも――」

食いに行くか。と緒方が言おうとした時、屋上のドアが勢いよく開いた。

「貴様ら！　ここで何をしている！」

葵だった。先ほど前まで泣きそうになっていたのが嘘のような態度だった。こちらが直立不動の姿勢を見せると、続けて言った。

「指定された場所以外での喫煙は禁止されているのだぞ！」

「申し訳ありません！　以後、気を付けます！」

緒方が言つと、葵はフンと鼻を鳴らした。

「まあ今回は大目に見てやる。次は無いぞ」

そう言つて勢いよくドアを閉め、またどこかに消えた。

しばらくして緒方が口を開いた。

「……あれで恩を売ったつもりか？」

「さ、さあ……」

真鍋と高坂にも分からなかった。

――ふと空を見上げた。普段とは違う空模様だ。台風が近いうちにこのあたりへ上陸するとテレビでも言っていたし、心配だな。

赤道直下に位置するこの国は、今なお国民の宗教観の相違により、小競り合いが絶えなかった。その埃と病根を映し出すかのように、今日も強い日差しが照りつける。

南沙諸島紛争の際の被害が他と比べても少なかったインドネシアの南カリマンタン州にある町の南端の倉庫で、十数人の男女が集まっていた。

それは二つの集団に分けられている。一方はこの国の民であることは肌の色を見れば明らかだったが、もう一方は有色人種に違いないが、明らかに肌の色も顔つきも違う。

双方が小火器で武装し、互いに睨みを利かせている。とても「友好的」な雰囲気ではなかった。

「お望みの品だ。扱いに注意しろよ。商品の管理はうちの業務だがな、売った後のアフターサービスは受け付けないからな」

英語でインドネシア人たちのグループの長の男は言った。そしてもう一方の異邦人側の長なのである黒髪の長髪の女が、「それ」を受け取るうとした時、倉庫の上空から、かすかだがレスプロ機のエンジン音が聞こえた。

「UAV！」

黒髪の女が鋭く言うと、インドネシア人は慌てて、シートのようなものを被った。もし国連軍の有しているUAVならばFLIR（前方赤外線監視装置）で発見されかねない。このシートは対赤外線効果のある材質で作られていた。

「お、おい！ あんたらも早く隠れろ！」

インドネシア人の男は言った。しかし異邦人たちは隠れるどころか、慌てる素振りさえ見せない。そして女は言った。

「大丈夫ですよ。このあたりのUAVのフライトプランは全て頭に入っています。ここには飛んできません」

女は大変にこやかに言った。こいつは何を言ってるんだ。インドネシア人たちはそれに気付く前に、五・五六ミリNATO弾の洗礼を浴びた。

――裏切られた。しかしそれに気付いた時、彼らはすでにこの世の住人ではなかった。血生臭いにおいが、鼻を突く。

悪夢は突然に少年を襲った。ルデイ・オスタンは数十メートル先に見える倉庫で「取引」が行われている間、この辺を警備する集団の中にいた。

ルデイたちはイスラム系のテロ集団だ。昨今の東南アジアにおけるムスリムの弾圧に対抗するべく組織された、小さな組織だったが、彼らには一つの国を滅ぼしかねない力があつた。――核兵器だ。旧ソ連製の小型核爆弾で、リュックサックに収まる程の大きさだったが、二〇キロトンの威力があつた。

合計三発保有していた。その内の一発を数億ドルである組織に、売り渡す予定だ。彼らが活動するためには、とにかく資金が必要だったからだ。

この「取引」が上手くいけば、しばらくは金に困ることもないだろう。ひよつとすればその恩恵を家族にも恵ませてあげられるかもしれない。家で待つ両親と、七人の弟と妹のことを思いながら、そんなことを考えた。

すると空の向こうから何かが、こちらに飛んできた。

敵か？ しかしそれはラジコンの飛行機だった。ラジコンは低空で倉庫の上を通り過ぎた。すると倉庫の中が何か騒がしくなったかと思つた途端、銃声が響いた。

まさか取引が失敗したのか。ルデイたちは急いで倉庫に向かった。その瞬間、道端に設置されていたクレイモア指向性対地雷が作動した。

クレイモアに収まっていた七〇〇程の鉄球が、C4炸薬のエネルギーによって撒き散らされ、彼らを粉砕した。

茂みの中から、擬装を施した夜戦服を着た数人の兵士たちが現れた。その中の赤い短髪の少女が、手に持っていた無線機に向かって言った。

「外のガードは無力化したで」

了解したと無線機の向こうからの言葉を聞きながら、少女は周りを見回した。そしてテロリストたちの死体——肉片の中で何かが蠢いたのを見つけた。自分の背丈の半分もない少年だった。いや正確には「自分の背丈の半分ぐらいになった」少年だったが。

少年の胴体は臍のあたりから下が吹き飛んでおり、上半身だけが辛うじて生きている状態だった。

ピンク色の泡を蟹のように口から吹きながら、胴体の断面から飛び出した自分の臓物を必死になって掻き集めていた。

少女は肩をすくめると、少年に近づいた。少年はやつとこちらに気が付いたようで、凄まじい形相でこちらを睨んでくる。それは恨みと恐怖が入り混じった表情だった。

少女はしゃがんで、ホルスターからトカレフ拳銃を抜くと、少年の額に銃口を押しつけた。そして言った。

「すまんなあ」

乾いた音が、赤道直下の空に空しく響いた。人類現代史始めって以来の、数億、数兆、数京回目の銃声だった。

「あー、もしもし？」

少女は再び無線機に向かって言った。

「すまん訂正するわ。今、全滅させたわ」

銃声が響く。ここは南カリマンタン州の街中にあるイスラム系過激派組織の、アジトの一つだった。

「クソ！ 何なんだ。あいつは！」

この組織のリーダーの男の隣でテロリストの一人が叫んだ。そしてAKの弾を撃ち尽くし男は、慌てて床にばら撒いてあるバナナ

上のマガジンを掴む。が、空であることに気付き、すぐに放り投げた。

「おい、早く弾を——！」

よこせ。と言おうとして男は絶句した。後ろでマガジンに弾を込めていた少女が倒れていたのだ。顔面の真ん中を撃ち抜かれ、風穴が開いている。どう見ても即死だった。

敵はもう向こうの廊下に迫っていた。敵はたった一人だ。にも関わらず、奴は三〇人以上いたこちら側の兵力をほとんど全滅させた。奇襲で不意を突かれた。と言ってもこれはひどかった。

「投降するぞ」

男はリーダーのその言葉に耳を疑った。リーダーは南沙諸島紛争からの筋金入りのテロリストで弱音を吐くような男ではないからだ。「そ、そんな！ 異教徒どもに膝をつくと？」

男はリーダーに食ってかかった。慌てて周りの仲間たちが男を取り押さえた。

「これ以上の戦いは無益だ」

しかし男は食い下がった。

「敵に辱めを受けるぐらいなら、いつそ地下の『あれ』で——」

「ところがどっこい。私たちは『それ』が欲しいんですよ」

異邦の訛りの混じった少女の声はそう言った。次の瞬間、ドアに三つの大穴が開き、先ほどまでリーダーに食ってかかっていた男の上半身が吹き飛んだ。男を羽交い絞めに使っていた男たちも、もれなく肉塊に変わり果てた。

「いやあ、ごきげんよう！ テロリストの皆様！」

大変、陽気な感じで部屋の中に入ってきた敵兵は言った。腕にはセミオートの二〇ミリ口径の対戦車ライフルが抱えられていた。リーダーは忌々しげに、両手を上げながら、その敵兵——茶髪のポニテールの少女を睨みつけながら言った。

「何が目的だ」

リーダーの言葉に、少女はまったくもう。といった感じで、対戦

車ライフルの引き金を引き絞った。リーダーの右の前腕の中ほどが根元から吹き飛んだ。

「もー、人の話はちゃんと聞いてくださいよお」

装薬のガス圧で薬室から二〇ミリ弾の薬莢が宙に舞う。

「我々の目的は、ここにある核爆弾ですよ！ さあ、早く出して下さい。面倒なことは嫌いなんです！」

リーダーは歯噛みしながらも、分かったと了承した。すでに他の仲間全滅しており、他の拠点からの増援を待っていれば、出血多量で自分は死ぬだろうし、そうでなくとも少女の姿をしたこの悪魔は、のんびりそれを待つてくれるとは考えにくい。それに――

「ただし、条件がある」

リーダーは失血で薄れそうになる意識を保ちながら言った。

「はい、何でしょう」

「この部屋の隣には、戦争で親を失った孤児がいる。あの子たちは見逃してはくれないか？」

すると少女は合点がいったという顔をした。

「それでさっきは、あっさり投降しようとしたんですね。意外と優しい方なんですね？」

「……最後に残った両親というやつだよ」

少女はふーんという顔をした。

「分かりました。じゃあチャンスは上げましょう」

「ありがとうございます」

そう言ってリーダーは懐から錆びついた鍵を出すと、少女に投げ渡した。

「この部屋を出て、突きあたりの右に地下へ続く階段がある。そこを下りた所に核爆弾のある地下室がある」

「はい、ありがとうございます」

次の瞬間、リーダーの男の頭が吹き飛んだ。

それから少女は、地下室に足を運んだ。リーダーが言った通り、目当ての小型爆弾を見つけた。一個で三〇キロ以上の重量があった

が、二個とも軽々と持ち上げてみせた。それから脱出しようとアジトの出口に向かったが、何かを思い出したように、額を掌で軽く、ペチンと叩いた。

脱出する前にアジトを爆破するよう言われていたことを思い出したのだ。そしてバックパックからC4プラスチック爆弾の塊を取りだすと、それを適当に切り分けると、建物の支柱に設置し始めた。「ああ、そうだ」

少女はそう言って、ある部屋に足を運んだ。あのリーダーが言った通り、そこにはまだ幼い少年や少女がいた。

「そうですね。私は言いましたね」

少女はホルスターから四五口径のジェリコ941を抜いた。そして何を思ったか、少年たちの両足に向かって引き金を絞った。絹を裂くような悲鳴が部屋を満たす。

「チャンネルを上げるって」

それから少女は重い対戦車ライフルを捨てると、部屋から出ていこうとしたところで、後ろを振り返り、少年たちに向かって言った。「この建物に爆弾を仕掛けました。その足じゃあ、ちよつと無理かも知れませんが、頑張つて逃げてください」

そしてウインクすると出口に向かった。後ろからは哀願の悲鳴が聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。

すると出口の方で何か怒声が聞こえた。恐らくは敵の増援なのだろう。少女はやれやれと首を振ると、何の躊躇いもなく窓から飛び降りた。三階の高さがあったにも関わらずだ。

普通なら重傷は避けられないのだろうが、少女は難なく地面に着地し、何事もなかったかのように走り出した。無論、両脇に核爆弾を抱えてだ。

通行人たちは少女に怪訝な視線を送ったが、それも目の前の建物が轟音と共に崩れ去るまでだった。

ちようと近所では道路整備の工事が行われていたので、建物の中での銃撃戦での銃声は聞こえなかったようだ。いきなり五階建ての

テナントビルが吹き飛んだのだから、驚かない方がおかしいだろう。しばらく走ってから、少女は後ろを振り返った。土煙と黒煙がもうもつと吹き出していた。

そして言った。白々しく、身勝手に、傲慢に。

「ごめんね」

男の名前は木原博。フランス陸軍外人部隊の上級伍長だ。今、木原は東南アジアのPKOの一環として、インドネシアに派兵された部隊の一員として任務に従事していた。

厳しい日差しが照りつける中、インドネシアのジャカルタ港には多数の船舶、軍の艦船がひっきりなしに、往来していた。数年前、核攻撃によって壊滅したとは、想像もできないぐらいの賑わいだっ

た。
木原は、思い出したように腕時計に搭載された放射線量測定器によつて、放射線量を測定した。ここに派兵されてから何度も繰り返していた行動だった。仲間からは神経質だとからかわれていたが、それでもこの癖を止めることは出来なかった。

本物の兵士は常に死に対して恐れを抱き続けるものだ。陸上自衛隊の陸士時代のレンジャーの教官が言っていたことを思い出した。

本物の軍隊に入る。そして多くの人を助けたい。

そんな単純な正義感から温室のように安全な日本を飛び出し、フランス陸軍外人部隊に入隊した木原だったが、多くの任務に従事している中で、宗教、思想、テロリズムなど多くの問題や、戦場における加害者と被害者の区別が曖昧な現実に向面した。

そして正義や大義といったものが戦場では、ほとんど無意味であり、多くの兵士にとって、重要なものは正義でも大義でも、ましてや金などでもない。生き残りたいという生存本能が兵士に引き金を絞らせるのだと悟ると、あのレンジャー訓練時代の教官の言葉を度々に思い出した。——あの教官は今でも元気なのだろうか。

そんなことを考えている時だった。ふと目の前に停泊している大

型貨物船の甲板に目を向けると、えんじ色のワンピースを着た長い黒髪の少女がこちらを見ていた。

しばらくして少女は笑顔で木原に向かって手を振った。

しばらくはポカンとしていた木原だったが、破顔して両手でそれに応えた。貨物船が汽笛を鳴らして出航の合図を出すと、少女が船橋に姿を消すまで、木原は手を振りつづけた。

自分のおかげであの子は今日も、笑顔でいられたのかも知れない。そんなクサイことを思いながら木原は防弾ヘルメットの顎紐を締め直した。そしてフランス軍が正式採用している自動小銃、FAMASを肩に吊るして、港の南端にある警備指揮所に向かった。

実はあの少女が着ていたワンピースが白かったこと、それがえんじ色に見えたのは、「元の乗組員だった」者たちの血で汚れていたからなのだが、そんなこと木原に分かるはずがなかった。

とある陸曹の話

高坂幹弘は、千葉県内にある町に生まれた。ちょうど阪神淡路大震災の前後のことだった。父と母。そして妹との四人暮らしで、父親は大手の銀行に務める銀行員で、高坂は何不自由なく暮らしていた。

高坂は凡庸な人間だった。スポーツにしても勉強にしても平均以上の成績を残したことはなく、唯一の取り柄と言えば、手先が器用だったことぐらいだ。

一方の二つ下の妹は何をやらせても、人より上手くやっけてのけて見せた。所謂、天才という人種だったらしい。サッカーのジュニアチームでフォワードを任せられたかと思えば、文科省の主催する絵画コンクールで大臣賞を取ったりと、その天才ぶりは周囲の大人の舌をまかせたものだった。

高坂はことあるごとに、この出来の良い妹と比べられたものだった。——何で妹に出来ることがお前には出来ない。周りの大人は事あるごとに妹と比べては、そう高坂を罵った。

そして高坂が受験に失敗した国立大付属の小学校に、難なく入学すると、親の関心は兄である高坂から離れ、妹に集中するようになっていった。

高坂は怖かった。このままでは両親に見捨てられるのではないかと思っただのだ。それから高坂は世間で言う所の良い子を演じ続けた。やりたくない仕事に進んで取り組み、行きたくない塾に行った。その甲斐あってか、六年生になると児童会の会長を任されるようになった。

そして小学校を卒業後、高坂は県内にある進学校に入学した。しかしこれが不味かった。凡人クラスの学力を無理矢理、底上げした代償か。中学での勉強に追い付けなくなっていたのだ。

何とか成績は中の下を保ってはいたが、両親はそれでは満足しな

かったようだ。毎日のように高坂に対してプレッシャーを掛け続けた。

さらに最悪なことに、中学生最後の年に妹が地元に戻ってきて、そのまま高坂と同じ中学に入学したのだ。再び妹と比較される生活が始まった。もう、うんざりだった。そして自分のためではなく親のために頑張ることが、だんだん馬鹿らしくなっていた。自分が生きてきた環境とは全く違う世界に行きたい。そして人生をやり直す。

そんなことを考えていたある日のことだった。高坂は近所のコンビニに足を運んでいた。

目当てのアイスを買い、店の外に出ようとした時だった。覆面を被った男が店内に押し入ってきた。

何だ？ 高坂が呆然としてみると、男はナイフを店員に突きだして、金を出せと脅し始めた。強盗だ。高坂は身の危険を感じ、とっさに商品棚の陰に身を隠した。それから店内を見回した。今のところ時分のほかには、強盗が一人と店員が一人。そして初老の男が一人いた。

警察を呼ばなければ高坂はそう思い、鞆の中から携帯電話を取り出した。だがその時、最悪のタイミングで電話が鳴った。

何でこんな時に。だがもう遅い。当然、着信音に気付いた強盗がこちらに近づいてくる。……やるしかない。商品棚の陰から飛び出した高坂は相手のナイフを持った方の手首を掴むと、レジのカウンターに叩きつけた。そして腕を捻りあげると、ナイフが落ちたので、とりあえずは強盗の手の届かない所まで蹴り飛ばすと、そのまま取り押さえた。

しかし強盗も高坂の鳩尾辺りを蹴り飛ばし、おもむろに懷から拳銃を取り出した。そんなもんを持つてゐるなら、何で最初から使わないんだ。この馬鹿は。しかしもう遅い。犯人は完璧に逆上しているらしく、高坂に向かって引き金を――

「待て」

——引けなかった。先ほどから店の中いた初老の男が、強盗に待ったをかけたからだ。強盗はますます興奮した感じで男に向かって銃口を向け——た、次の瞬間、まるで錐で木を突いたような音がして、強盗は仰臥した。見るとその眉間にはナイフの柄が生えていた。しばらく呆然とその光景を眺めていた高坂だったが、男に手を貸してもらって、何とか立ち上がった。

そして、とりあえずは礼を言った。男は神山昇と名乗ったので、高坂も自分の名を告げた。

そして男は——神山は高坂に、何故あの時、逃げなかったのかと聞いてきた。

高坂は答えに窮したので、とりあえずは勘が働いた。とだけ言った。すると神山は面白そうに鼻を鳴らした。そしてあの場面では、悪くない判断だと言った。

褒められたのだろうか。高坂は何となく礼を言った。

すると続けて神山は言った。お前は将来の夢もなく、今の自分の人生に不満を持っているのではないか。そしてそのチャンスが巡ってくるのを待っているのではないか？ そう高坂に聞いてきた。

高坂は絶句した。神山の言うことが、あまりにも当たっていたからだ。神山は続けた。もしよければ自衛隊に來ないか。

あまりに突拍子もない言葉に、高坂は思わず呆けてしまった。

このまま自分が何者なのか、何が出来るのか分からないまま人生を終えたくないのならば、自衛隊に來い。無論、嫌だと言うのなら無理強いはいしない。

神山はそう言うつと、高坂の目を見据えた。高坂も負けじと見返した。そして息を飲んだ。よく見ると神山の顔や腕には生々しい傷跡が見受けられたからだ。

神山は、やがて別人のように穏やかな顔になると、今更到着した警察におとなしく連れて行かれた。これが高坂と神山の出会いだった。

——それから半年後、中学を卒業した高坂は、陸上自衛隊富士教導団少年生徒隊に入隊した。ここは普通科（歩兵）、機甲科（戦車）、特科（砲兵）におけるベテラン陸曹を早期に要請する部隊だ。

○六〇〇時（午前六時）起床の二二〇〇時（午後一〇時）就寝。この間、過酷な訓練や課業が待っている。

掃除に洗濯にアイロンがけ。厳しい体力錬成。自衛隊の組織構造の把握と各種法令の勉強。兵装の操作と整備。

所々が老朽化した営舎の廊下をピカピカになるまで磨き上げさせられ、軍靴（自衛隊では護衛靴と呼ぶ）を磨く際は顔が写り込むまでやらされる。

上官とそれ違いざま、先に敬礼をしなければ拳骨。ぼんやりしていると理不尽に拳骨。小銃の安全装置を誤って解除したままにしているとタコ殴りにされた。

下手をすれば他の仲間がとばっちりを食うので、嫌でも迅速かつ的確な行動と、強固な連帯感が生まれた。一つのミスが全員の命を左右しかねないので、殴る方も殴られる方も必死だった。

最初こそ、とんでもない所に来てしまったと後悔はしたが、小、中学時代の「努力」の賜物か、決してずば抜けてはいないが、人並み以上の学力と体力を持っていた高坂は、怒られるよりも褒められる方が多かった。

生徒個人の能力の比較はあくまで、自衛隊という組織の中で働く自衛官の平均値から算出した数値であり、ここから察すれば高坂が「優秀な自衛官」であると測定されるのは、不思議なことではなかった。

お前は近頃の若い奴と違って根性があつて、頭も良いし、体力もある。将来はきつといい自衛官になれるぞ。妹ではなく自分を真正面から見つめてくれた教官の言葉に高坂は、ここが、自衛隊が、自分にとって最後の居場所なのだと確信した。

そしてその教官はさすが神山陸将補が推薦しただけのこととはあると続けた。神山を知っているのか。高坂の問いに教官は懇切丁寧に

教えてくれた。

いまから十年以上も前、自衛隊はPKOに初めて参加し、カンボジアに派遣された。しかしその派遣された先の駐屯地の近くにある村が、ポル・ポト派のゲリラ集団に襲撃される事件が発生した。

当時、二等陸佐で派遣部隊の指揮を執っていた神山は、直ちに部下に対し応戦を命じ、そして村人を避難させようとした。

しかしゲリラは、避難しようとする村人たちにも攻撃してきたので、神山は、自分一人がここに残り、敵を食い止めると言って、姿を消した。

それから数時間後、銃声と爆音が収まったので、派遣部隊はその後、応援にきた米陸軍のレンジャー部隊との合同偵察部隊を編成し、村に偵察しに戻った。

そこで彼らが見たのは、村のあちこちに転がるゲリラの死体と、ただ一人、他人のものなのか、それとも自分のものなのか分からないほどに、全身が血にまみれた男が立っていた光景だったそうだ。

最低でも三〇〇名前後のゲリラを、神山はたった一人で釘づけにし、撃退したのだ。以降、神山は最強の兵士として、自衛隊では伝説的な存在になったのだという。

しかし高坂は腑に落ちなかった。何故そんな大物が、自分のことを見染めたのだろうか。すると教官もそこまでは知らないと言った。それから高坂はFPSの操縦士を育成する「戦闘外骨格操縦士養成課程」に進んだ。FPSの「歩兵を支援する高い機動力と火力を持った兵器」という性格から、陸自では普通科に配備されている。そのため生徒隊にこの課程が導入されている訳だ。

FPSの操縦も整備も、要は基本の部分さえ押さえていれば、後はそれを基に実践や応用の技術を磨いていけばいい。どうも頭でよりの体で覚える能力に優れていたらしい高坂は、課程をとんとん拍子で進んでいった。それを見ていた教官や同期からも一目置かれるようになった。

教育期間の三年間が終わり、FPSの操縦士の資格（ウォークバツジとも呼ばれる）を取り、三等陸曹の階級を与えられた高坂は、そのまま富士教導団に配属させられた。

生徒隊を卒業後は、全国各地の部隊に配属させられるのが普通なのだが、高坂の場合は、その自衛官としての実力が認められた結果だった。

それからしばらくして高坂の目の前にまた、神山が現れた。今度は陸将補の階級の付いた野戦服を着ていた。神山は高坂に、私の学校に来い。と言った。

通称「神山学校」。全国の部隊から選りすぐりの陸自隊員を引き抜き、過酷な訓練を受けさせることで、より実戦的な兵士を育成する目的で、神山を中心とした中堅幹部によって組織された。いわば戦闘のプロフェッショナルを要請する学校だった。

別に拒否する理由は無いと、高坂は二つ返事で、神山学校に入学することを決めた。しかし硫黄島に特設されたこの「学校」地獄のような訓練が待っていた。

基本は学校の部活で行われる強化合宿とは変わらない。しかしこれに寝ない食べない訓練が追加される。さらに徒手格闘や射撃といった基本から、施設爆破や要人暗殺などの応用などに必要な知識を徹底的に叩きこまれる。しかも外部に知識や技術が流出することを防ぐために、筆記用具の使用は禁止。すべて見聞きしたことを丸暗記しなければならぬ。うる覚えだと自分はおろか仲間にも危険が及ぶので皆、必死だった。

他にも三〇キロの土嚢を背負ったの四八時間不眠不休の連続行軍。さらにはレンジャー訓練でも実施されていないゴム弾を使用した模擬戦もあった。ゴム弾の衝撃は、骨の髄にまで響き、教官のありがたい怒鳴り声のおかげで、痛みが増した。

だが高坂は三カ月の地獄を生き抜いた。ちょうど二〇才の誕生日のことだった。この歳での課程修了者は神山学校発足以来、史上最年

少の快拳だった。

そして課程修了者向けの歓迎式典が終わり、いよいよ明日、原隊の富士教導団に戻ろうと荷造りをしている時だった。高坂は神山に呼ばれた。

学校の校舎の屋上で二人は対峙した。神山はそこに座るよう高坂に促すと、自分もその場で胡坐をかいた。そして何処から持ってきたのか、一升瓶に入った焼酎を紙コップに注ぐと、高坂に渡した。その表情は、普段の訓練の時に見せる鬼神のような形相ではなく、どこにでもいる普通のおっさんの顔だった。

潮風に吹かれながら二人は酌を交わした。そして神山は「海兵旅団」にこないかと、高坂に言った。

しかし陸自に「海兵旅団」という名の部隊があるとは聞いたこともなかった。海兵旅団とは一体何か。高坂の問いに神崎は一言「戦える自衛隊」だと答えた。いつもの「兵士の表情」でだ。

今までの自衛隊は、旧ソ連の北海道侵攻を始めとする大規模な正規戦を想定した、訓練を実施していた。

最初は空自の支援戦闘機による対艦誘導弾による攻撃で接近してくる敵艦隊を漸減する。海自も護衛艦及び潜水艦の部隊による、対艦攻撃を敢行し、敵の本土上陸を防ぐ。そして敵が上陸した際は、陸自は特科による支援攻撃の下、それぞれの部隊が敵上陸部隊を撃破する。これが、自衛隊が長年抱いていた戦闘の流れだ。

しかし現代戦では対ゲリラ戦及び対コマンド戦といった不正規戦が主流であり、この戦いで必要は迅速な機動力と打撃力だった。今の自衛隊の戦略ではこれに対処することは難しい。

そこで従来の自衛隊の部隊とは別の行動権限と、戦力、機動力を有した部隊。「戦える自衛隊」のあるべき姿。「海兵旅団」の創設を唱えたのが、神山だった。

海兵旅団は米海兵隊のMEB——海兵遠征旅団をモデルとしており、独自の地上戦力、航空戦力、兵站戦力、指揮部隊から構成される。そして一から新しい旅団を創設するのではなく、既存の旅団を

再編することだった。

そして最終的目的地は島国日本を守る究極の盾。陸将自衛隊の「日本国海兵隊」への改編にあるのだという。

神山はここまで壮大な構想をほぼ独力で推し進めていた。無論その陰には自衛隊の「暗部」——防衛省と防衛産業や、自衛隊高級幹部の退職後の天下り先との癒着によって生じた「歪」が彼を手助けしたと言っても過言ではない。

しかし神山にとって、国防という「理念」を追求すれば、自ずと汚い「現実」に直面するということは、計画の範疇であつたし、逆にそれを利用してやろうというのが、彼の考えだった。

高坂は神山という人間にすっかり魅せられていた。そしてほとんど迷うことなく「海兵旅団」に志願した。

かくして高坂の新しい自衛官への道が開かれた訳だが、その道は平坦なものではなかった。いきなりの二階級特進。続々と導入される新兵器の操作と整備の習熟。そして何よりも高坂の頭を悩ませたのが、葵風子三等陸尉だった。

葵は防衛省内局のお偉いさんの親族であり、その親族が「経歴に拍を付けるために」と、葵を第一五旅団に配属させるよう神山に強引に迫つたらしいのだ。結局、官房機密費と特別会計での優遇を持ちかけてきたので、神山は承諾したらしい。

軍隊というのは下から上へのリコメンド——つまり下位の者が判断を下し、それを上位の者に「提案」という形で伝達し、命令させることで成り立っているのだが、葵はそれがずいぶんに入らないらしい。

とにかく下は上からの命令に、絶対従うべきであり、それに不服を抱く者は悪であるという考えを持っているらしい。

さらに自分の指示の結果が好ましくなければ、部下を責め立てて恥じないという凄まじい神経の持ち主でもあった。そのため葵とその部下——つまり高坂たちとは事あることに対立した。

やがて指揮官と上級陸曹との対立は部隊の士気を左右させる事態にまで発展していた。さらには葵が女だということで、必要以上に彼女を庇護する馬鹿マツチヨまで現れ、高坂たちの頭痛のタネは消えそつになかった。

しかし悪いことばかりではない。真鍋陸曹長や緒方陸准尉など、神山学校の卒業者として、その道のベテランとしては自衛隊内では有名だった自衛官たちと共に仕事が出来たり、各国の軍隊と交流できる機会が増えたりしたことは、高坂にとって嬉しいことだった。これで人生の到達点が未知なもの変わったからだ。高坂は自衛隊に入隊したばかりの時に感じた高揚感を思い出した。

そして海兵旅団の能力を試される運命の在日米軍との大規模演習が、目前に迫っていた。演習に向け、やれることを全力で――その時、営舎にサイレンが響き、高坂はベッドの上で目を覚ました。

とある少女の特殊任務

台風直下の中、大型貨物船「ガシタン号」の甲板上では、激しい銃撃戦が展開されていた。何人かが荒れ狂う波間に飲みこまれたが、それでも助ける余裕は、自分たちにも相手にも無かった。

「しつこいで！ ほんま！」

関西弁でそう吐き捨てながら、少女は銃を撃ち続けた。しかしついに、自動小銃の弾が切れた。

——いよいよこれまでか。少女はサスペンダーに吊っていた銃剣を抜いた。その時、向こうのから大口径の弾丸が飛んできた。自動小銃や短機関銃の類ではない。おそらく対戦車用のライフルなのだろう。

少女はそのあたりに向かって、銃剣を投げつけた。無論、この雨と風だ。当たる保証はない。

雨と共に銃撃も激しさを増す。相手は本気で少女たちを殺しにかかっていた。周りにいる大人たちも覚悟を決めた顔をしている。そんな中、少女は隣にいた若い男に怒鳴るように言った。

「あの子は？ あの子はちゃんと逃げたんか？」

「ああ！ ちゃんと『荷物』を持ってな！」

男が必死の形相で答えると、少女はニツと笑った。

「ほな、これで心置きなく戦えるわな！」

そう言つて、懐からリモコンのようなものを取り出した。そして一瞬、躊躇したが、すぐにボタンを押しこんだ。

甲板に亀裂が入ったかと思うと、そこから爆炎が噴き出し、甲板上にあった全ての者を焼き尽くした。そして「ガシタン号」の船体を支える竜骨と呼ばれる部分にも、爆炎は襲いかかり、結果、「ガシタン号」の船底は中央から真つ二つに裂け、またさらなる破壊をもたらした。それから数分もせずに、船体のほとんどが海面に没した

時、二度目の大爆発を起こした。こうして「ガシタン号」という船があったという物的証拠は、海底を潜水艇で操作するぐらいでしか、探しようが無くなった。

少女は救命ボートの中から、一部始終を見ていた。突然の閃光と爆風。巨大なその船の終焉。そしてそれは今まで苦楽を共にした仲間たちとの今生の別れでもあった。

しかし悲しむ余裕など、少女に与えられるはずもなかった。ふと船内の隅に目をやると、大きめの黒いボストン・バッグが三つ並んでいるのが目に入った。それぞれには、一つの都市を一瞬で昇華させたらしめる、人類が生み出した最悪最強の「悪魔」が眠っている。少女の任務はこの「悪魔」を無事に、飼い主に送り届けるのが彼女の任務だった。命に代えても、これを守りきらなければならなかった。そうしなくては今まで死んでいった仲間に申し訳が立たないからだ。

しかしそんな少女の思いを嘲笑うかのように、天候は悪くなる一方だった。そしてもっと最悪なことに、自分と同じように救命ボートで脱出した「彼らが」もうすぐ後ろにまで迫っていたのだ。

助けを呼ぼうにも通信機器は「彼ら」の手で破壊されていた。そしてついに、彼らの乗ったボートがぶつかってきた。

——ここに乗り込んでくるのか！　だが、その瞬間、まばゆい閃光がその場にいる全ての者の網膜を焼いた。

しかし相変わらず、最悪な天候だった。

三

一四式戦闘外骨格を始めとするFPSが優れているのは、何も二足歩行による走破性能と、フレキシブルな戦場に対応出来る武器の換装性だけではない。二本のマニピレーターを駆使することによって、人と同じような細かい作業が出来ることにある。

「おい！ 慎重にな！」

「分かってる！ ちょっと静かにしろ！」

高坂はヘッドセットのイヤフォンから聞こえる同僚の陸曹の声に、怒鳴り返した。

今、高坂は先の台風で倒壊した、那覇市内にあるビルの建築現場において、高坂は一四式に乗って、建築資材の下敷きになった工事作業員たちの救助に当たっていた。

現場は足場が不安定で、消防の救助作業車による救助が困難と判断されたため、小回りが利き、不整地での作業を得手とする一四式に、さらに一四式をほぼ完璧に扱いこなす数少ない人材である高坂に白羽の矢が立ったわけだ。さらに一四式にはFLIRとミリ波リーダーが搭載されていることで、視認できない要救助者を確認することが出来た。

鉄骨の下に作業員のつなぎの青が見えた。FLIRの画像から体温が確認出来る。まだ、生きていた。

慎重に、慎重に、作業を続ける。そして最後の鉄骨をどけると、そばにいた普通科隊員たちが作業員を助けた。

「ここで確認される。リストから察するにこれで最後だな。リーダーからも要救助者の反応は無いし、早く次の現場に向かうぞ」

フォックスチームのチームリーダーである真鍋陸曹長の声がヘッドセットに響く。

「まだ、他にもあるのですか？」

高坂は言った。

「それは現場に向かう途中で話す。行くぞ」

高坂は一四式を七三式大型トラックの荷台に降着させる。すぐに真鍋の一四式も荷台に乗る。

「出発してくれ」

真鍋はトラックの運転席に乗る同じフォックスチームの三山に言った。しばらくするとトラックのエンジンの振動が伝わってくる。

那覇港にはすでに多くの部隊が到着していた。

多数の瓦礫が港の岸に漂着しており、何かの木材だけではなく、油のようなもので、海面に浮いている。その中に人のような物体を見つけて高坂はぎょつとした。しかしそれはマネキンの残骸だったので、ほっと胸を撫で下ろした。

「この近海で大型の貨物船が転覆したから、これほど大量の漂着物が流れ着いているらしい。今日はこの瓦礫撤去で終わりだ」

真鍋は言った。今、高坂たちは港に降り立っていた。

「これぐらいなら、ボランティアに任せればいいじゃないか」

三山は口を尖らせた。部隊のムードメーカーではあるが、極度の面倒くさがりなのだ。高坂は三山の後頭部をはたいた。

すると港の入口から一台の大型トラックが現れた。それは高坂たちから見て、十メートルぐらいの距離に止まると、十数人の陸自隊員を吐き出した。そしてその中の隊員の一人がこちらに歩み寄ってきた。

その襟章には二等陸佐の階級章があった。高坂たちは敬礼した。

「あなた方はここで何を？」

女の幹部はそう聞いた。

「第五一普通科連隊、第一機械化小隊、フォックスチームのリーダーを務めます、真鍋将太陸曹長です。我々は湾の瓦礫撤去の任でここに。失礼ですがあなたは？」

すると女も答えた。

「本州からの災害派遣部の仲村渠美緒^{なかんだかり みお}二等陸尉です。……ここは我

々が引き継ぐ。君たちは帰還しなさい」

口調は穏やかだったが無言を言わずといった感じだった。だが真鍋は納得しなかった。

「しかし正式な命令は来ていませんし——」

「それは君たちの問題だ。とにかくここは私たちが受け持つ。これは命令だ」

ここまで言われるともう、どうしようもない。真鍋はここを離れるよう部下に言おうとした。

その時だった。高坂の目に何かが映った。それは海面に漂う瓦礫の中にあつた。「GASHITANG」と黒で刻印された木材や救命用の浮き輪のような無骨な漂流物とは明らかに違う質感を持った——
「人だ！」

誰かが叫ぶと同時に、高坂は瓦礫だらけの海面に飛び込んだ。油特有の臭いが鼻を突いた感じがしたが、気にしていられなかった。人の形をしたそれは何とか資材にしがみついて、肩から上を海面に出していた。

何とかそこまで泳ぎ着くと、高坂はその要救助者を抱えた。やはりマネキンなどではなかった。

息を飲んだ。それが高坂よりも年下の少女だったからだ。長髪の手で風貌は東洋系。年齢は一二、三歳ぐらいか。

そして高坂は少女の首筋に指をあて、脈を確認する。力強い脈動を感じた。そして防水性能を持った携帯式の無線機に吹き込んだ。

「こちら高坂！ 要救助者を救助。支援を乞う！」

しばらくするとゴムボートがこちらに向かってくる。そこにはあの仲村渠と名乗った二佐が乗っていた。

連隊のある駐屯地への帰り道、高坂は黙り込んでいた。あの美しい少女のことを思い出していたのだ。妙な心の中に引っかかりを覚えていたからだ。

「しかし、酷い話ですよ、一曹？」

いきなり三山が話を振ってきた。

「あ？ ああ、今年に入って台風が来たの、これで三度目だもんな」
高坂がそう言うのと、三山はそういうことじゃないっす。と口を尖らせて言い返した。

「あの、仲村渠って二尉の話っすよ。仮にも人の命を救った人間に対する態度なのかって」

高坂は、ああ。と思った。あの後、高坂たちは少女をアンビ（自衛隊での救急車の意）に乗せると、他の部隊と一緒に邪魔者のように港から追い出されたのだ。

「まあ、でもさ、人の命が一人助かったんだ。悪いことばかりじゃないさ」

「本当にお人よしなんすねえ。一曹は」

三山がまだブツブツ言っているのに苦笑いしながら、高坂は、あれから一言も発していない真鍋のことが気にかかった。

高坂はコックピットから身を乗り上げながら、前に降着している真鍋の一四式に向かった。もちろんヘッドセットの無線を通じての会話なのだから、そんな必要な無いのだが。

「真鍋陸曹長」

「ああ……」

「何かあったんですか？」

「……ああ。あ？ いいや何も無いぞ」

一応、こちらの声は聞こえてはいるのだろうが、「心ここにあらず」という感じだ。こういう時には、何か考え事をしているのだろう。話しかけない方がよさそうだな。一年ほど共に働いていると真鍋の考えていることが大概は分かった。

高坂はどっかりとシートに、もたれかかるように座った。開け放たれたコックピットに、真夏の日差しが差し込む。

第五一普通科連隊の駐屯地にある格納庫では、整備士たちが目まぐるしく走り回っていた。そしてその屈強な男たちの中に、その場

に似つかわしくないほど華奢な背中が、黙々と一四式を整備していた。

「雁屋二曹。そのスパナ取って下さい」

「はい」

「じゃあ、そのオイルも」

「はい」

雁屋は整備小隊を手伝っていた。本当は高坂たちと一緒に行動するはずだったのだが、間の悪いことに彼女の乗る一四式の脚部が破損してしまったのだ。

それで留守を任されたのだが、皆が必死になって働いているのに、自分だけ休むわけにはいかないと、整備小隊の手伝いを買って出たわけだ。整備小隊は機械化中隊の後方支援部隊であり、車両、通信、火器の三つの整備分隊からなる。

一応、雁屋は自衛隊が装備する兵装に対する、ほとんどの知識を修得しているので、足手まといになることは無かった。

「よし！ こんな所でしよう！」

「こんな所ですか？」

「ええ！ 今から浮原島の演習場に引っ張って行って、実弾ブチかまして大丈夫ですよ！」

そう言っつて小酒井は満足そうに、一四式の二五ミリ速射機関砲の砲身を愛でるように撫でた。

「ずいぶん嬉しそうですね？ 兵器が好きなんですか」

「まあ、好きじゃなきゃ、こんな所で働きませんよ」

小酒井は中学の頃、何とかという暴走族のリーダーだったらしい。しかし父親が死に、家への収入を確保するために自衛隊に入った。そして元々、戦車や戦闘機といった兵器が好きだった小酒井は、前期教育課程を修了すると武器科に配属させられたのだという。そして整備の腕が評価され、さらに神山にその腕を見染められるという恩恵を授かり、海兵旅団行きが決まったのだ。

「ここの旅団は最高ですよ！ まあ小隊長（緒方）みたいな鬼軍曹

もいますけど、俺好みの兵器が沢山ありますし——」

そう興奮して言いながら小酒井は振り返った。しかしそこには雁屋の姿は無く、代わりに緒方が仏のような笑顔で仁王立ちしていた。

小酒井の悲鳴を背に雁屋は、駐屯地の出入り口に向かっていった。

高坂たちが帰ってきたので、出迎えに行くのだ。

そしてその道中、雁屋は小酒井の話を思い出していた。そして彼は家族のために自衛隊に入ったと言っていたが、自分は何のために自衛隊に入ったのかと考えた。

雁屋が自衛隊に入った理由は特になかった。別に将来の夢もなく、高校を卒業してから務めるはずだった企業が不況の煽りで倒産し、食べるのに困らなければ別に、どんな職場でも良かったのだ。

雁屋に父親と母親はいなかった。幼い頃、事故で死んだと聞いたが、それは物心の付く前の事だったので、覚えているはずもなかった。

そして親代わりに、親戚の夫婦の家が引き取ってくれたのだが、それも世間体を気にしてのことだったので、雁屋に愛情を注ぐようなことはなく、むしろ辛く当ってくる事の方が多かった。その理由は日によって様々だった。仕事がうまくいかない。どちらかが浮気をした。株で大損をした——理由は何でも良かったのだ。

とにかくこの夫婦にとってまだ幼かった雁屋は、自分たちの鬱憤を晴らす丁度いい、いわばゴミ箱のような存在だったのかもしれない。そんな家庭環境の中で、自分は愛されることも、愛することもない人間なのだと、雁屋が決め付けたのはごくごく自然な話だった。

雁屋が自衛隊に入った理由は、食うに困らないというだけでなく、一種の自己被虐から来ていたのかもしれない。だからFPSの操縦技術が認められ、海兵旅団に行くことになっても、嬉しくとも何ともなかった。

そんな時だった。彼に出会ったのは。自分よりも年下だが、階級は一等陸曹で、噂では神山旅団長が以前に運営していたという特殊

な術科学校を、史上最年少で卒業したエリートらしい。もつとも彼の性格なのか、そのことを自慢するようなことは決してなかった。何時しか雁屋は彼に惹かれていった。

彼が営舎の窓から外を眺めていると、何を見ているのか気になった。彼が物思いに耽っていると、何を考えているのか気になった。彼が眠そうにしていると、何か突かれるようなことでもあったのか気になった。

しかし雁屋は彼から、自分と同じような同族の臭いを敏感に感じ取っただけであり、特に女として惹かれたわけではない。

ただ自分と同種の間人間が現れたことが嬉しかっただけだ。しかし、だからこそと言うべきか、彼は自分の事を理解してくれるのではないかと思ったのだ。そんなことを考えている内に彼は仲間と共にトラックに乗って帰還してくる。

雁屋はトラックに駆け寄った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2890ba/>

防人の詩

2012年1月13日13時37分発行